

高見順全集



高見順全集

別
卷

高見順全集 別巻

昭和五十二年九月二十五日印刷
昭和五十二年九月三十日発行

編者 「高見順全集」
編纂委員会

発行者 井村寿二

印刷者 山田 博

発行所 勁草書房

東京都文京区後楽二―二三―一五
電話東京(八一四)六八六一
振替東京五一七五二五三
0395-834100-1836

* 定価は外面に表示してあります

* 無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます

高見順全集
別卷

目次

I 作家論

高見順断片	山室静	5	高見順	日沼倫太郎	136
高見順	平野謙	9	高見順「解説」	中野好夫	153
高見順論	青柳優	43	高見順論	平林たい子	160
高見順氏について	十返肇	47	高見順―挫折者の夢	磯田光一	164
高見順論―主としてスタイルについて	北原武夫	62	高見順「解説」	佐々木基一	175
高見順	中島健蔵	64	高見順論	久保田正文	181
高見順論	渋谷驍	68	時代について	亀井秀雄	188
中野重治と高見順	窪川鶴次郎	71	高見順	奥野健男	203
技巧の羞恥	中村光夫	83	高見順「解説」	川端康成	214
高見順論	矢崎弾	93	高見順「人間研究」	中村真一郎	218
高見順	中村真一郎	113	高見順「解説」	本多秋五	229
東京のヘドを吐く作家	山本健吉	120	高見順の人間研究	今日出海	239
反俗的俗物	花田清輝	131	高見順「解説」	川端康成	248
			高見順	久保田正文	260
			オデュッセウスの帰還	磯田光一	286

高見順とチェーホフ……………旭季彦……………301

仮面の人―小説・高見順……………豊田穰……………314

高見順の『文学非力説』……………平野謙……………357

Ⅱ 作品論

「虚実」……………渡川驍……………365

「流木」……………阿部知二……………366

高見順の「私の小説勉強」……………豊田三郎……………367

「故旧忘れ得べき」解説……………武田麟太郎……………371

「花さまさま」……………新田潤……………374

「如何なる星の下に」解説……………北原武夫……………375

高見順「文芸随感」……………小田切秀雄……………377

「故旧忘れ得べき」について……………野間宏……………380

高見順論―詩集『樹木派』をめぐって……………真壁仁……………382

高見順『インテリゲンチヤ』……………寺田透……………392

「天の笛」解説……………武田泰淳……………395

「胸より胸に」解説……………中村真一郎……………397

『如何なる星の下に』……………伊藤整……………400

対談・現代文壇史……………猪野謙二……………403

「都に夜のある如く」解説……………亀井勝一郎……………405

告白と共感の位相……………橋川文三……………408

結着のつかぬ現実―『敗戦日記』高見順著……………堀田善衛……………418

敗戦日記……………青野季吉……………419

「わが埋葬」解説……………清岡卓行……………420

高見順氏の『いやな感じ』……………金子光晴……………424

高見順『いやな感じ』……………久保田正文……………425

いやな感じ……………伊藤整……………428

大疑アレバ大信アラン……………本多秋五……………429

詩集「死の淵より」……………安東次男……………436

高見順詩集「死の淵より」について……………村野四郎……………438

高見順日記が語るもの……………木下順二……………440

高見順日記・第三巻……………白井吉見……………443

『死の淵より』について……………井上靖……………444

高見順の新しい詩集について……………伊藤整……………448

高見順詩画集『重量喪失』……………鶴岡冬一……………451

高見順詩画集『重量喪失』……………吉行淳之介……………452

「高見順日記」を読む……………伊藤整……………453

Ⅲ 人物論

高見順……………宇野浩二……………459

腐触の時……………坂本満津夫……………462

高見さんのこと……………佐多稲子……………465

高見順の死……………金子光晴……………467

悲しい思い出	中村真一郎	468	高見順の高間芳雄時代	新田潤	529
高見順君を送る	伊藤整	470	回想の高見順	中村真一郎	534
高見順氏のこと	山本健吉	471	弟子・闇市のかなしみ	井上光晴	542
最後の高見順さん	小田切進	473	鴨川の高見さん	近藤啓太郎	546
母と日記と仏教と	丹羽文雄	476	制作座の頃の高見順	新田潤	551
高見順の死をいたんで	壺井繁治	478	順応と反抗	中村光夫	556
高見順と文学館	稻垣達郎	480	高見順の死	南川周三	561
高見順の文学世界	渋川曉	482	悲しみの虹	黒田三郎	564
高見順と昭和文学	磯田光一	484	高見順と永井荷風	阪本越郎	570
高見順をいたむ	内野莊児	486	別れのことば	中島健蔵	573
晩年の高見さん	八木福次郎	488	癌とそうめん	埴谷雄高	579
ビルマの葉巻き	倉島竹二郎	490	高見順と歴史	本多秋五	581
「昭和知識人」の苦悩の典型	奥野健男	492	含羞の怒り	石原慎太郎	587
高見順をおもう	中野重治	496	高見さんと「日曆」	大谷藤子	589
高見順と東大新聞のこと	末松満	500	同人雑誌時代の高見順	小田切進	592
弔辞	伊藤整	502	「鎌倉文庫」時代の高見順氏	巖谷大四	600
弔辞	芹沢光治良	503	高見さんのこと	水上勉	604
高見順断片	平野謙	505	「共產黨員として死にたい」	神山茂夫	607
返子時代の高見さん	本多秋五	512	「高見順像」と「名医像」	朝井関右衛門	614
高見さんのこと	円地文子	517	最初の文士	田辺茂一	615
完璧な近代作家	田村泰次郎	521	詩人高見順哀悼	橋本一明	618
高見順氏と私	吉行淳之介	526	大正文学研究会と高見順	渋川曉	622

受付をやる男	石光葆	627
高見順の思い出	朱牟田夏雄	633
生死の詩	中川宗淵	636
高見順の一周忌に	伊藤整	644
高見順―無気味な「死」の話	小林勇	647
深夜の自画像	武田文章	649
高見順さん	上林猷夫	651
漂鳥のとき	矢口純	652
「荒磯」執筆の三日間	広部英一	664
高見順没後十年	小田切進	666
高見順	ドナルド・キーン	668

Ⅳ資料

高見順出生当時の三国	高間新助	673
高見順・ふるさと年譜	高間新助	680
年譜	小野美紗子	684
著作目録	小野美紗子	690
著書目録	青山毅	754
参考文献目録	青山毅	760

初出誌紙一覧

高見順全集・作品索引

高見順研究

I
作
家
論

高見順断片

山 室 静

『外資会社』で高見氏はある変化を示している。当然私はこの変化の解明に従わねばならないのだが、最近の氏の作品を系統だつては読んでいず、また差当つて読む暇のない私は、実はやや呆然として立ちすくむのだ。

一見して力作であるに疑いなく、また或いは傑作であるらしくあるこの作品を前にして、ある「変化」があると云つて手早く「発展」といい得なかつたのも、従来読みなれて来た氏の作品世界とこれとの間に、首肯し得べき連関と持続を直ちには発見し得ない故だ。そしてこのものが発見されない限り、評価は不安定たらざるをえない。すべての作品に作者の意識的な操作を越える偶然の神の加護がありうることを云つた後に、なお真実としてそれは止ることであるから。併しこれらが正に同一の作者の手になる限りそ

こに何らかの連関がなければならぬこともまた自明だとすれば、私は更に歩を進めてみるより他はない。

一体初期の『猛者』其他の作品は暫くおき、『起承転々』や『嗚呼いやなことだ』等一連の、高見氏をして際立たせた作品系列を特色づけたものは、何であらうか。一言に云つて理想を失つたインテリゲンチヤ的小市民の生活頹廢の喘ぎと不安な享樂を、それにふさわしい一見投げやりな、しかし如何にもインテリらしい巧緻で華麗な説話体に、虚実をまじえて物語つたもので、そこに一面自己が戯画化されると共に、一面切実な自己救済の念もひそめられることを欠かなかつたのであつた。かかるものとして、それは現在の世態小説としての、我々の外圍と心内のもやもやした混沌にふさわしい客観主観両面のある切実な真実性を含む故に、高い世評を呼んだと思われる。「描写のうしろに寝てゐられない」と叫んだ華やかで悲痛げな身振りのうちに、英雄人を欺くていの香具師じみた大げさな見振りがあるにしても、そこには錯乱した現実自身ごとと陥没し、我が身をその犠牲とすることによって、何らかの生々しい真実を手握みに握んで浮上りたいという祈願の裏付けがあつたことは争われない。素材の錯乱と方法の錯乱が作者の誠実によつてある均衡をえたところに、破調風であれ一スタイルを生んで、自らを過渡期の一典型となした。高見氏に於て最

も高く評価しなければならぬのはこの点であると私は思う。

かく云うことは、おのずから当面の『外資会社』の評価を含んで来る。ここにはいま私が見たような作品性格はない。高見氏はより客観的な立場に立ち、着実な手法と心情のうちに、一外人会社の表面華やかでデモクラチックな、実は冷酷な物質的精神的風景を、美しいタイピストの眼を通して描いている。一見混迷からの鮮かな立直りであり、作家的な生長である。そしてこのかなり複雑な素材を、悠々と客観的に見事に浮上らせている手腕は、作家としての氏の力量の程を知らしめる。かの説話体風の世俗描写をとりに去っても、作家としての氏の地位に揺ぎはないと云える。

しかし私はなおこの点に拘泥する。氏の力量については既に十分知っている私達は、この新たな作品に於て更にそれを確認するのみでは満足しえない故に。かかる氏の豊かな才能が、なお自らを貧しと切実な懊悩に強いる如き場所への、氏の格闘を欲すると云っている。氏がかち得た安定を再び錯乱に追い落す無責任な放言であるとされようと、この欲求を駆り立てるものは、他ならぬ氏自身の私という一読者に与えたものにつながる。例えば「描写のうしろに寝てゐられない」という氏自身の叫びにである。

タイピスト茂子は、この外資レコード会社を映す鏡の役割を与えられている。採用試験に出掛けて行く彼女は最初

はそのあくまでモダンで颯爽とした会社の外貌に近づき、無用の虚飾を捨てた建物や社員の自由で無作法とみえる人間関係に、ビジネスライクな西洋風の清々しい魅力を感じる。しかしやがてそれらはほろ苦い内容を曝してくる。整然とした工場は儲けるだけ儲けた後で内地資本へ高価に売付けるためであり、出勤時刻に社長と社員間に交される素気ない挨拶は、自由で独立な人間関係であるより、外人群と日本人平社員間の絶対的な地位と待遇の隔絶に対する無力な反抗を含んだニヒリスチックな表現であり、開放的と見えた事務所を囲む鉄網は、かつて工場従業員の包囲を受けて繞らされたものであった。

彼女はまた当然社員の一群を、最初の接近から次第に奥深く映し出して行く。最も多く彼女が交渉するのは、同じタイピストで仕事の上での先輩である八重子、宣伝係主任の戸沢、広告係の金原の三人だが、与えられた役割を彼女はここでもかなり見事に果している。しかし彼女が彼らの誰一人の立場にも陥没しないことで、視点を柔軟広潤にしているにしても、それだけお嬢さん風の浮上りでこの現実にはまり込み掴まれきつていず、結局、感受力の澄んだ鏡であるに止って、一存在としての沈痛な限どりを持ちえない。彼女に比べれば上記三人の如き遙かに独立な存在性を保持しているが、かと言ってこの作品はそれらの人々を厳

しく追いつめたものでもない。ここに一つの問題が、少くとも私にとっての不滿が生れてくる。

人は云うかも知れない。これは題名の示すがように「外資会社」を描いたもので、個々の人物に關したものでない。しかしそれは見かけに過ぎない。ここには巨大な外資の動く現実的場面の描写はない。正しくは「外資会社のある人々」とでも題さるべきであらうような、一外資会社の事務室内の人々の生活と心理の陰影やその交錯を描いた作品である。そしてその事に私の不滿はなく、それどころか我々が物質的機構を描くのは、正にそれが如何に人間と交渉し、如何に我々を解放し或いは限定し歪曲する又しないを探るためであるという意味に於て、機構そのものでなく、主体としての人間にとつてのそれを、そこに働く人間を描くことに深く賛成するものである。「一人の人間の心内の歴史が一国の歴史より重要でないとは言えない」(レルモントフ)のであるから。

この観点から見ると、作者の眼の代理としてのタイピスト茂子が、新入の外来者として、浮上った通過者として単に浅く交渉するのみで、この現実の渦中深く巻き込まれた一存在一人格として自己を定着していない点で、作品を浅くしている憾みがある。自分を一般社員から烈しく区別することで孤立的に己を守ろうとし、朝夕の通勤の電車の中

でも洋書に読みふけるようなオールドミスの八重子のある意味で厭味な様々のヒステリイじみたポーズ、学生時代マルキストだったが今はニヒリストらしいと自嘲的に云っていつも何かブー云いながら、やがてサボタージュに入つた工場の従業員大会の状況を窓越しに眺めて陰惨にドギマギとしよぼつくような金原、わけて、見るからに精神的な、機械のように自分自身を酷使してバリバリと仕事から仕事へ休むことなく、同僚から「会社さまさま男」と嫉視と反感の一斉射撃を受けながら、けちくさくいじけた所なく、足下に現実を踏まえてのし上り、しかもニヒリストであると自任している戸沢、彼らにはすべて茂子と比較にならぬ垢じみた現実の生活があり心情があり性格がある。その内部に一步ふみ入つた時どれだけの百鬼夜行が現前するのか。この外資会社をも含めて彼らを取囲む一切の現実がどれだけ圧力を以て彼らにのしかかり、どれだけの歪みと反抗がそこに混沌と蟠るか。その深みまで作者の烈しい眼が達する時、見られたものは単なる虫けらの如き一サラリーマン一人間の蠢動でなく、あまねく人間一般の運命に、そのかなしい情熱と生活の一切の屈折につらなるものが見られた筈である。一時代一場所の風俗としてでない、ひとつの象徴としての一世界がそこに見られるのである。

高見氏の従来の類魔風の説話体風俗小説を、私がかなり

高く評価したのも正にそのような事情による。かつて氏の作品の『嗚呼いやなことだ』に触れた時も、私はその頽廢と錯亂の辿り方が情緒的であつて即物的でなく、従つて烈しい統一回復の祈念がこめられずむしろ安易な雰囲気になれを享樂しているに近い点を指摘しつつ、身体ごとそこに自らを投げ出して、すべての小賢しい自己救済の方法の放棄の果に、頽廢と錯亂の生理が描く線に添ふことで、氏が一種の逞しい造形力を獲得したことを喜んだのであつた。勿論そこに一種狡猾などいうには余り切實な仮面と虚構のお芝居もあつた。しかしそれらは止むを得ざるものであると共に、現代の一性格であり、かくて作品は現代一面の典型的な風俗小説として象徴の域に接していたと思われた。その錯亂の浅き弱さすらが等しくわれわれすべてに通う現代的性格として。

『外資会社』の高見氏は、その錯亂もろとも錯亂を裏づけた切實な統一への意欲をもふり捨てたかと思える。作品としての疑いもない成人ぶりが、作者の人間觀の深化に裏付けられたと見えぬとすれば、われわれの完成への祝意は戸惑うのである。勿論人は錯亂の中に生き続けることは出来ない。何らかの統一がえられなければ、錯亂はわれわれを引裂くだろう。事実その種の犠牲となつて狂死した作家なしとしない。またある人々は神秘的な汎神論的諦念のうち

に一種の平和をあがなつた。しかし多くの日本の作家の場合、より現世的で素朴な生活力が、微温のうちに烈しい亀裂を埋め去つた。熟しめせず冷め切りもしない日常性が、散文の名によつて詩を鎮めた。

高見氏のこの優れた作品には、そのようなあまり好ましくない日本の小説の伝統への追従であると断ずるに、多くの残余がある。かつての氏の錯亂の切實性を信じる私に、氏のより高い統一が信ぜられない筈もない。しかし畏友平野謙がその秀れた『高見順論』（人民文庫）で明らかにしたように、氏の錯亂が氏の眞実であると共に手探りで偶然探りあてた好都合な、しかし一面的にどぎつい限どりであつた事も事實である時、そしてそれ以前の作品系列とそれら「高見的」な作品系列との間に正統の發展の連関が微弱である時、この『外資会社』の突然の変貌にまた一抹の危惧を抱かざるを得ないのも止むを得ない。それは氏の多才を示しはするが、既に十分明らかであるそのもの以上の何物をもこれにつけ加えないから。敬愛するこの作家の一見疑う余地なき力作に対しての所感が、右のようにやや不安を含んだものであつたことは、私自身にとつても不幸であつた。

高見 順

平 野 謙

昭和八年九月に創刊された『日曆』第一号の編輯後記に「高見順君の『感傷』は、本人は隨筆として編輯部に送つて来たのだけれど、読んで見ると小説として立派に通るものであると思われたので、編輯部の独断で創作欄に入れてしまった」云々としるされてある。

今日、高見順という現代的風貌を身につけたひとりの作家をあげつらう場合、私にはこの二十枚たらずの、隨筆のつもりで小説欄に組まれた『感傷』という小篇の分析がたいへん重要と思われる。高見順のいわゆる説話体文学の最も渾熟とした実作として、私は、『虚実』（昭和十一年十月）を探りたいと思うものだが、そこにみられる限どりのかなりはつきりした作家的面貌は、すでにこの小篇に明瞭に定著されてある。『感傷』から『虚実』にいたる三カ年は、

その作家的生長において、ほとんど一眼で見透しのきく一本道である。『感傷』以前の短からぬ文学的閱歷にもかかわらず、今日の高見順を構成する出発点として『感傷』こそただしく処女作に該当すべき作品だろう。

しかし、重要なことはそこから三年後の作家的成熟を瞭然と読みとり得るというような尋常の事情には存しない。反対に、『感傷』を書きあげたとき、そこから『起承転々』（昭和十年十月）をへて『虚実』にいたるただひとすじの作家的特質について、高見順自身明瞭な自覚を持ち得なかったことが問題なのである。たとえば佐藤春夫が『西班牙犬の家』を書き、志賀直哉が『或る朝』を書いたような、自己の文学的稟質の確乎たる自覚の上に立ったぬきさしならぬ制作態度は、ここにはまるでなかったといつていい。いや、もっと手近かなところで、『煙管』に出發した新田潤にくらべても、そういうえなくもないのである。極言すれば、『感傷』は微弱な一個性が漠然と困憊した精神のうちに、小心翼翼として手探りで書いたかりそめの作品にほかならない。しかも、そのような文字どおり偶成の作が、その後の作家的發展をほとんど身じろぎもできない程度に縛りつけてしまったのだ。ここに私は高見順の文学の孕むかなしい現代的性格のあらわれをみたいと思う。